

忍 戀

土田龍太郎

忍戀しのぶこひを題に詠める大和歌げにあまたにてえ數へつくしがたきはさることなれども、こ
とに名に流れたるものとは、村上天皇天徳内裏歌合にて、平兼盛たひらのかねもりの詠みし忍ぶれど色
に出でにけりの歌と壬生忠見みぶのただみの詠みし戀にすてふわが名はまだきの歌の兩首をあげではあ
るべからず。この時の判者いづれ優れりとも決めかねつれば持ぢになしてやみなむとせしを
りしも、主上左方兼盛の歌を低き御聲にて口ずさみたまひしかば、すなはちこれをぞ勝ち
に定められたりける。負にきはまりし右方の忠見、いきどほりに耐へざりしにてもやあり
けむ、やがて病みつきてほどなく身まかりぬと語り傳へたれど、げにこれにつけても、か
の世の人の大和歌に寄する執心なほざりならざりしさまいとこそ思ひ知らるるなれ。

世下るにしたがひて歌合の催しのすたれゆきはいかにともせむかたあらざりけめど
も、題詠ばかりだに今の世にはいとまれになりぬるはげに歎かしからでやはあらむ。さは
れこの題詠といふことひと絶えはてつともはた言ふべからで、正月歌會始しげの御儀につ
て忍戀てふ敕題のかつて下さるまじきにもあらず。さるをりにあはば、選に入らむまでこ
そはかたからめ、おのが祕めたる戀の歌つたなき一首なりとも詠み進まらせむこと、いとし
も畏かしこけれども、これさへまた大御心おほみこころに添ひまつるよすがともなるべければ、むげに思ひ
捨てなむはなかなかちをしまし。

老いらくの戀を詠まむこと、歌がらいやしからでおもしろき一節だにもあらば、あなが
ちに憚はばからでも宜しかるべし。さはいへど、わがごとくよはひ七十路ななそぢに入りてはや三年ま
で経ぬるものの、おのが身の老いさらばへみづはぐむまでなりぬるを顧みで、なまじひに
あはれ知り顔にさし出でつつ、忍戀の歌など詠まむとせば、いともにくげにてさすがかた
はらいたからまし。いかで世の笑ひ草となり爪はじきせられむやも測りがたし。さればひ
たぶるに老いしぬるわがみづからの戀ならで、あるは戀に惱めるまだ年若きをのこに代り

て歌作るさまにもてなし、もしはまたはかなくてやみにし昔のことのつくづくと俣ばるる
ままにわが身をしばしがほど作り物語の中の人に擬なぞへつつ、忍戀の歌詠まむとならば、い
ささかにも罪ゆるさるるかたのありもやせむとてなむおほけなくも左に腰折二首ばかり
掲げまくほりするなる。

わが戀は野中にたえぬ忘れ水

音ねにこそむせべ問ふ人はなし

海士あまの焼く藻鹽の煙下もえの

やるかたもなきわが思ひかな

(令和二年十一月二十四日受附)